
赤い満月の昇る空

菊太間郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い満月の昇る空

【Nコード】

N2186D

【作者名】

菊太間郎

【あらすじ】

ダイスケと、友達のリョウとユキが異世界につれてこられて、三人は異世界の戦争や様々な問題に巻き込まれる。三人は帰ることができるのか。

0 繋がる世界、赤い満月

第0話「繋がる世界、赤い満月」

チャイムが授業の終了を告げた。

「おつす、ダイスケ。帰ろうぜ。」

まだ授業中の眠りから覚めきっていない僕を誰かが揺さぶる。

うつすらと目を開けると、そこにはよく見知った顔

そこそこ整った顔立ちに、180を超える身長。

「あ、リョウくん。うん、ちょっと待って。」

急いで準備をする。

といつても、机の中の道具を入れるだけだけど

「お待たせ。じゃあ、帰ろっか。」

「おう。」

僕たちが教室を出ようとすると

「あ、ダイスケにリョウ、待って。わたしも帰るわ。」

後ろから声をかけられる。

黒の長髪、容姿端麗の顔立ちの見知った顔

「あ、ユキちゃん。ユキちゃんも帰るの？剣道部は？」

ユキちゃんは1年生なのに高校剣道の全国大会三位の成績を持っている。

とても強くてリョウくんはよくユキちゃんを馬鹿にして竹刀で殴られている。

僕ら三人は小学校のころからの友達だ。

「今日は休みな。さ、帰りましょ。」

僕たちは途中の公園で少し話して帰ることにした。

「でね、エミったら彼氏ともう別れたらしいのよ。先週付き合い始めたのよ。信じられないわよね。」

「まあ、そんなもんなんじゃねえの？本人同士の問題だしな。」

「でも、私なら一度付き合いだした人と簡単に別れたりしないわよ。」

「でも、ユキちゃんって今まで付き合ったことないよね？どうして？あんなにモテるのに。」

ユキちゃんは入学してから半年たつ今でも月に1、2回のペースで告白されている。

なのに一度も付き合ったことがない。

「わたしは剣道が忙しいし、今のところそついうの興味ないからね。」

「そつか」。剣道がんばってるもんね。」

「まあ、剣なら俺も負けるつもりはないけどな。」

リョウくんの家は古流剣術の道場をやっていてリョウくんも昔からやっていて、とても強い。

「リョウくん強いもんね。」

「そついえば、ダイスケも昔リョウの家の道場に通ってたんじゃないかった？」

「うん。全然弱かったけどね。」

「なに言ってるんだよ。うちの親父、お前に道場継いでもらうとか本気で考えてたんだぞ？」

「えっ、ダイスケってそんなに強かったの？」

「ああ、結局俺も最後まで勝てなかったよ。」

「なんでやめちゃったの？」

「それは・・・」

そのとき、ふと空が暗くなった。

「えっ！なに？」

風が強くなった。

空を見上げると赤い満月が浮かんでいた。

「なんだこれ！」

そのとき目も開けられないような突風が吹き、目の前が真っ白になった。

「う・・・ん。」

僕が目を開けると、よくゲームに出るような大きな神殿の前に居た。

周りを見ると、二人も呆然と立っていた。

そして、空を見上げると

赤い満月

1 呼ばれた僕らと衝撃告白

1 「呼ばれた僕らと衝撃告白」

「なんなのよこれ・・・」

ユキちゃんがそうつぶやくが、僕だって聞きたい。

「ここはどこだ？俺たち、公園にいたんだよね？」

リョウくんも困惑しているようだ。

僕も何がなんだかわからない。

どうぞ、お入りください

そう聞こえた。

いや、聞こえたと言うのは正しくない、頭に響いた、そういう感じだ。

「二人とも、今、聞こえた？」

「ああ、俺にも聞こえたぜ。」

「わ、私も・・・」

どうやら聞き間違えではないみたいだ。

「ど、どうするの。はいるの？」

「はいろつよ。このままじゃ何もわからないし・・・」

「そ、そうだな。よし行こうぜ。」

僕らは神殿の中に入っていった。

中に入ると、誰かが居た。

「ようこそ、この世界へ。私はエルといいます。」

そこには、長髪の、すらつとした、透き通るような肌の、この世のものとは思えないほど美しい女性だった。

「いろいろと聞きたいこともあるでしょう。どうぞ、腰をお掛けください。」

そう言われ、僕らは言われるがままに差し出されたイスに座った。

「それで、ここはどこなんですか!？」

ユキちゃんが身を乗り出して言った。

とても困惑しているようだ。

まあ、無理もないか、こんなことになったんじゃ。

「ここは、あなた達からすると異世界ってことになります。」

異世界か・・・確かにそう言われると否定できる要素がない。

「なんで、俺たちがこんな見知らぬ異世界に？」

リヨウくんは少し落ち着いているようだ。

やっぱり頼りになりそうだ。

「それはおそらく・・・今この世界に起ころうとしている戦乱を止めてもらうためだと思います。」

「戦乱？」

「はい。この世界にはいくつかの国があるのですが、そのなかでも特に力を持つ大国ヴァンガ王国が戦争の準備を始めているということです。このまま各国を巻き込む戦争になればこの世界にたくさんの血が流れてしまいます。」

「なるほど、それで、なんで俺たちなんだ？」

「この世界には、女神アルエルがいるといわれています。女神は、世界が危機に陥るとき世界を救うにふさわしい者を呼ぶと伝えられています。そして私は、その呼ばれた方々を導くための巫女です。でも・・・」

エルさんは僕のほうを向いて言った。

「あなたが呼ばれたこと、それは必然だと思います。」

「え？」

「ようこそ、おかえりくださいました。今は亡き聖クリス王国の1
8代目正当後継者ダイスケ様。」

2 僕の決意

2 「僕の決意」

「はい？」

何を言っているのかわからない。

「なに？どうということなの？」

本当にどうということだ？何もわからない。

「昔、聖クリス王国という国がありました。その国は、この世界で最も栄えていた国でした。そして、その国の王族は代々女神の祝福を受け世界の平穏を保つ、そういう使命を与えられてきました。そして、聖クリス王国を筆頭とした聖国家同盟により平和は守られてきました。」

しかし、聖クリス王国の王子が女神の祝福を受ける日に、以前から聖クリス王国と敵対関係にあったヴァンガ王国の襲撃を受け、聖クリス王国は滅ぼされ、王と王妃は、まだ女神の祝福を受け終わっていない王子を連れて異世界に渡ったのです。」

「その王子が・・・僕だっというんですか？」

「はい。王の名はセイ、王妃の名はシズク。あなたの両親です。おそらく、もう生きてはいないでしょう・・・儀式もなしに異世界に渡るということは、それだけ代償も大きくなりますから・・・」

「

確かに父と母の名前だ。

二人は僕が幼いころに原因不明の病気で死んだことになっている。

「聖クリス王国が滅んだ今、ヴァンガ王国に対抗できる国はないでしょう。しかし、聖クリスの血が途絶えずに生き残っていることを知れば、あるいは……」

「僕が、その国の王子だって言う証拠はあるの？」

「ここにはありません。しかし、聖国家同盟の生き残りのアルス王国には聖剣アルファートが伝えられていると聞きます。」

「あるふぁーと？」

「聖剣アルファートは、聖クリス王国の初代国王に女神アルエルが授け、歴代国王に引き継がれてきました。その剣は聖クリス王国の血を引き継ぐ人間にしか抜くことはできません。アルス王国に行き、聖剣をアルス王国の国王の前で抜くことができれば、あなたが聖クリス王国の王子だと証明できれば力を借りられるかもしれません。」

「……………」

頭の中がこんがらがってきた。

「ねえ、どうなってるの？ダイスケが王子？わけわかんない。」

「俺に聞くなよ……」

「まだわからないことだらけでしょう。今日のところはお休みください。」

僕は案内された部屋で眠りについた。

夜、なんだか目が覚めて外に出た。

「星がすごいな。」

空を見上げると満面の星空だった。

都会ではとてもお目にかかれない光景だ。

「眠れないのですか？」

後ろを振り返るとエルさんがいた

「はい、なんだか・・・あの、エルさん、聞きたいことがあるんですが・・・」

「なんですか？」

「僕たちは、戻るんでしょうか。」

「この世界と異世界を繋ぐ扉、ゲートといわれるものがあります。おそらく、それを使えば戻るはずですが。ただ、戻る際の儀式などについては私は詳しく存じておりません。しかし、そのゲートは聖クリス王国の王都ラクセルにあります。そして、王都は今ヴァンガ王国に占領されています・・・」

「つまり、帰るにはヴァンガ王国を倒すかヴァンガ王国に気に入られるかしかないってことか・・・」

「そうです・・・しかし、私としてはあなたにこの世界を救ってほしいと思います。私はこの世界に生まれ数百年この世界を見守ってきました。この世界を愛しています。ですから・・・。」

「それは、まだわからないよ・・・。僕はこの世界の何を何も知らないんだ。何をしたらいいのかなってわからない・・・」

「そうですよね・・・。」

エルさんは少し悲しそうな顔をした。

「そういえば、僕が呼ばれたのは必然って言うてたけど・・・もし、僕が本当に王子なら呼ばれたのはわかる気がする・・・でも、二人が呼ばれる理由はないんだ・・・もしかすると、二人は巻き込まれたんじゃないのかな？」

「そうかもしれません・・・お二人はあなたの近くにいたために巻き込まれたのかもしれません。」

「ねえ、お願いがあるんだ。」

「なんですか？」

「あの二人を巻き込みたくないんだ。だから、あの二人を全てが終わるまで、ここに匿ってほしいんだ・・・」

「あなたはどうするんですか？」

「どうやら呼ばれたのは僕だけみたいだし、僕だけが行くよ……
・今から出発したい。」

「わかりました。ここは世界の時の狭間、ここにいれば二人に危害は及ばないでしょう。しかし、あなたはそれでいいのですか？二人に何も言わずに……」

「うん。それでいいんだ……二人とも優しいから僕について来てくれるって言うと思うんだ。だから……」

「そうですか……わかりました……それではこちらに……」

案内されてきたのは大きな鏡のある部屋だった。

「この鏡に入れば、世界に行くことができます。どこに出るのかが決められないのが難点ですが……しかし、大きな儀式をしてあなたを目的地に送り出せば恐らくお二人にも気づかれるでしょう。」

「わかった……じゃあ、行ってくるよ。」

「その前にこれを……旅に必要な道具が入っています。」

大きな皮袋を手渡される。

「ありがとう。最後に、二人に伝言を頼めるかな。」

「はい。」

「何年かかるか分からないけど、必ず全てを終えて戻ってきます。それまで待つていてほしい・・・」

「わかりました。異世界から来たあなたにこんなことを頼むのはおかしいと分かっています。ですが、お願いします。この世界を・・・どうか・・・」

僕は膝をつき神に祈るように手を組むエルさんを背に鏡の中に入っていた。

3 魔のモノに襲われし深淵の乙女

3 「魔のモノに襲われし深淵の乙女」

「う．．．」

目を開けると周りは一面森だった。

どこに出るかが分からないといっても、せめて人が居そうな所にしてほしい。

「とりあえず、森から出ないと．．．何か役立ちそうなものはあるかな．．．」

僕は、横に落ちていたエルさんからもらった皮袋を覗いてみた。

皮袋からは一振りの剣の柄が飛び出していた。

「真剣か．．．使うのは初めてだけど身を守るものが無いよりはマシか。」

世界地図が入っているが現在地が分からないと使いようもない。

他には、干し肉やナイフ、方位磁石や水など旅に必要そうなものが一通りそろえてあった。

「ところで、森から出るにしてもどっちに行けばいいんだろう．．．」

・
」

僕は途方にくれた。

下手をすると森のさらに奥へ行ってしまうかもしれない。

ガサッ

どこかで足音が聞こえた。

耳を澄ましてみると、後ろのほうから聞こえてきた。

人が居るのかもしれないが、もしかすると猛獣かもしれない。

僕はこっそりと足音のするほうへ進んだ。

足音にだんだんと近づく……

そして、木の陰から女の子の姿が見えた。

僕が、声をかけようとした……

「！！！」

僕は女の子の後ろに、巨大な、熊に似た怪物がいるのに気づいた。

怪物は、すると足音を立てずに女の子に近づいて鋭く爪の伸びた腕を振り上げた。

「危ない！！！」

僕は飛び出した。

女の子は僕の声に気づき後ろを振り向き悲鳴を上げた。

女の子と僕の距離は50メートルほどある、普通に考えると怪物が腕を振り下ろすほうが断然速い。

しかし、僕は走り出して気づいた。

体が軽い、走るのが異様なほどに速い。

女の子との距離がぐんぐんと縮まる。

そして、僕が女の子に向けて飛び込むのと同時に怪物の腕が振り下ろされた。

間一髪だった。

なんとか女の子を抱きかかえて怪物の腕が振り下ろされたところから抜け出した。

「下がってて！」

僕は女の子が木の陰に隠れたのを見て、剣を抜き、昔リョウくんのだ道場に通っていたときのことを思い出し構えた。

怪物は僕のほうを向き雄たけびを上げ、腕を振り下ろしてきた。

僕はそれを受け止めようと剣を出す。

だが、熊のようなこの怪物の攻撃を受け止める力は僕には無い。

僕は怖くなり目を閉じた。

しかし、

ガシイイ

怪物の腕は剣の側面に当たり止まった。

おかしい、怪物の攻撃がそれほど重く感じられなかった。

だが、そんなことを考えている暇は無く、怪物は僕に向かって再び腕を振り上げた。

しかし、動きもやけに遅く見えた。

僕は昔道場で習った動きを思い出した。

怪物の腕に剣の側面を当てて受け流し、そのまま怪物の横を抜けながら胴を斬りつけた。

血が噴出し、怪物が叫びだした。

怪物は逆上し、僕に向かい腕を振り下ろした。

僕は怪物に向けて剣を構え突撃した。

怪物の腕が頬を掠めた。

それでも止まらず怪物の腹に剣を突き刺した。

怪物は叫び声を上げ暴れだした。

僕は少し離れてそれを見ていた。

怪物はしばらく暴れているうちに、動きが鈍くなっていき、もうしばらくして動かなくなった。

怪物が死んだことを確認すると、僕は女の子に声をかけた。

「大丈夫？ 怪我は無い？」

女の子は少しおびえた顔をしている。

無理も無い、もう少しで死ぬところだったんだし

少しすると、女の子は表情を取り戻した。

「あ、ありがとうございます。」

女の子は深々と頭を下げてきた。

「いや、別にいいんだよ。怪我はないようだし・・・」

「あ・・・怪我・・・」

女の子は僕の顔をじつと見つめた。

さっき怪物の手が頬を掠めたときに切っていたようで血が流れている。

「ああ、このくらい大丈夫だよ。」

僕は心配させないように明るい声で言った。

「でも、手当てをしないと・・・そうだっお礼もしたいですし、私の村に来てください。父と母も歓迎すると思います。」

女の子は名案を思いついたというように笑顔で言った。

人の住むところに行けるということで僕はその申し出をありがたく受けることにした。

「それでは、ついて来て下さい。あっそうだ。」

女の子は歩き出してすぐに何かを思い出したかのようにくるりと振り向いた。

「私フィリアって言います。よろしくお願いします。」

「僕はダイスケ。よろしく。」

4 隠されし亡国者らが村

4 「隠されし亡国者らが村」

フィリアさんとはばらく歩いているうちにいくつかのことに気づいた。

一つはどうかこの世界の重力は元の世界よりも小さいようだ。

そのおかげで僕の身体能力は異常なまでに高くなったようだ。

もう一つは、この世界の人間と僕たちの世界の人間の外見上の大きな違いがないこと。

フィリアさんも、髪は薄い栗色で肩まで届くくらいで、身長は160くらい、目は青色で顔は整っている。

エルさんといいフィリアさんといい、こちらの世界の人はみんな美形なのだろうか。

「着きましたよ。ここがわたしたちの村です。」

フィリアさんの家まで案内された僕は、フィリアさんが両親に事情を説明するのを待ち、中に入った。

「あなたが、フィリアの命を救ってくれた方ですか。ありがとうございます。」

中に入ると、フィリアさんの両親がいきなり頭を下げてきた。

「いや、僕は偶然通りかっただけですし・・・」

僕がそういうと

フィリアさんの父親が顔を上げて

「・・・・・・・・！！！！セ・・・・イ・・・・様・・・・！！？いや、そんなはずは・・・・しかし・・・・」

突然父の名前が出たことに驚いた僕は、身を乗り出して声を荒げて言った。

「父さんのことを知っているんですか！」

僕がそういうと、フィリアさんの父親はさらに驚いたような顔をし、フィリアさんも、フィリアさんの母も驚いていた。

「失礼ですが。あなたの名前は・・・・」

「ダイスケです。」

「王子・・・・生きておられたのですか。私は聖クリス王国騎士団長をしておりましたカーネルといえます。よくぞ、よくぞご無事で・・・・」

カーネルさんは、涙を流し始めた。

「王子、私は王宮の料理長をしていたサラといいます。」

フィリアさんの母のサラさんも何か感激して今にも涙を流しそうだ。

「王子、今までどうしておられたのですか？王と王妃は・・・」

僕は今まであったことを全て説明した。

「そうですね・・・そういうことでしたか。狭間の神殿のエルにも会ったのですか。それで王子、これからどうするおつもりですか？実はここは聖クリス王国の生き残りの造った村です。ですから、王子がヴァンガ王国を倒しに行くおつもりなら我等も力となりましょう。」

「それは、まだわかりません。確かにヴァンガ王国のしたことは許せません。しかし、僕が聖クリス王国の名前を使い戦争をすれば、いたずらに多くの命を奪うことになるかもしれない・・・それに、僕には待たせている人たちがいるんです。彼らのためにも僕は帰る手段を手に入れなくてはいいけません。」

「そうですね・・・なら、どうするのか決めるまでこの村に滞在してはいかがです？皆も喜びます。それに、この村にいる間に私の教えられることなら何でも教えましょう。泊まる場所ならウチに泊

まったださればいいですし。」

僕は突然の申し出に正直感謝した。

この世界のこと何も知らない状態でまたあの森の中に帰るのは正直つらい。

寝る場所のことも心配しないでいいのなら言うことは無い。

そして、聖クリス王国の王子が来たという話は瞬く間に村中に広がった。

家には村中の人を押しかけてきた。

みんな歓迎してくれて、中には泣き出す人も大勢いた。

みんな盛り上がって村を上げての祭りとなった。

僕はみんなに囲まれてお酒を大量に飲まされた。

そして、なんとか僕はみんなから逃げ出して村の外れにある川に来了た。

僕は、川のほとりに腰掛けて、靴を脱いで川に足を入れた。

水がひんやりとして気持ちよかった。

「王子、主役がこんなところにいるいいんですか？」

フィリアさんが隣に座った。

「いやゝもうへろへろで。フィリアさんも抜けてきたの？」

「私は・・・王子が川に行くのを見たからなんとなく。」

「そつか・・・。ねえ、なんでみんなは僕をこんなに歓迎してくれるのかな。もう聖クリス王国はないのに・・・僕は王子じゃないのに・・・」

フィリアさんはいまさら何をというような感じで

「それは、みんなが今でも聖クリス王国が好きだからですよ。だから王子、あなたが生きていてくれてみんな嬉しいし、歓迎もします。だから、いつまでもこの村に居てください。」

と言った。

温かい言葉だった。

「ありがとう・・・。ねえ、一つお願いがあるんだけど。」

「なんですか、王子。」

「その王子って呼ぶのやめてもらえないかな、カーネルさんたちみたいな大人の人が呼ぶのはきつと今でも残る父さんたちへの忠誠心からくるものだと思うてるんだけど、やっぱりフィリアさんみたいな同じくらいの歳の人に呼ばれるのは何だか恥ずかしくて・・・」

フィリアさんはポカンとして僕の話の話を聞くと

プツと笑って言った。

「わかりました、ダイスケさん。でも、それなら私のことはフィリアって呼んでください。」

「わかったよ、フィリア。」

僕たちは、顔を見合わせるとお互いに少し照れているのか顔が赤いのに気づいて、どちらからともなく笑い出した。

「さ、ダイスケさん。そろそろ戻りましょう。きっとみんな、あなたのことを探してますよ。」

フィリアは立ち上がると僕に手を差し出した。

僕がフィリアの手を取って立ち上がって

「もうお酒はこりこりだよ。」

と言うと、フィリアと僕はまた笑い出してしまった。

そして、僕たちは、また祭りの広場に戻っていった。

5 深淵に伸ばされし王国の手

5 深淵に伸ばされし王国の手

僕がこの村に来て一ヶ月がたった。

僕はもうこの村にすっかりと馴染んでいた。

村の子供たちとも仲良くなり、僕は充実した毎日を送っていた。

「ダイスケさん。そろそろ時間ですよ。」

フィリアの呼びかけで僕は稽古の時間に気づく。

この村に来てから僕は毎日カーネルさん達に剣の稽古をつけてもらっている。

「うん、すぐ行くよ。」

村はずれの森

ガキイ

二つの剣が打ち合う音。

カーネルさんの剣を受け止め、僕はすぐに飛びいた。

二振りの剣が僕に斬りかかる。

ギリギリのところで剣をかわしつつ、反撃の機会をうかがう。

カーネルさんと副団長をしていたというトムさんの息はピッタリで反撃の機会がなかなか見つからない。

僕が徐々に追い詰められていった、その時

カーネルさんとトムさんの剣が同時に振り下ろされた。

チャンスが来た。

僕はトムさんの剣を払い飛ばすと同時にカーネルさんの剣を避け、カーネルさんの横に回りこみ、カーネルさんに剣を向けた。

「「まいった。」」

「いやーそれにしても私達じゃ相手にもなりませんな」

トムさんは豪快に笑っている。

「いや、そんなことないですよ。実際危なかったですし。」

「それにしても強くなりましたな。もはやどの国の騎士を相手に

しても遅れをとることはありませんよ。」

確かにこの一ヶ月の間に強くなったとは思う。

最初は防ぐだけで精一杯だったカーネルさんの攻撃も大分見えるようになってきた。

でも、僕は未だに自分がどうするべきなのかを見つけることができずにいた。

「おや、なにやら村のほう騒がしいですな。」

確かに村のほうから声が聞こえてくる。

何かあっただろうか。

「三人共大変だ！」

一人の男が叫びながらこっちに来了。

「どうした？」

「ヴァンガ王国の兵隊が村に！」

その言葉を聞いた僕らは急いで村に戻った。

村に戻ると、村の入り口には人だかりができていた。

人を押しのけて何とか一番前に来る。

そこには、30人ほどの甲冑に身を包んだ兵隊がいた。

その中の隊長らしき男が言った。

「ここが聖クリス王国の残党の村であることは既に分かっている。
大人しく我々に従え。」

人々の間にざわめきがおこる。

もちろん従うということは殺されるということだというのは皆分かっているようだ。

人々が動揺しているとき、5歳くらいの男の子が飛び出した。

「ここは僕達の村だ！帰れ。」

男の子は手に持った木の棒で隊長を叩いた。

「このガキが！」

隊長は剣を抜き男の子を斬りつけた。

男の子の胸からは血が吹き出た。

僕は急いで男の子に駆け寄った。

「よかった、生きてる。だれか治療を！」

男の子は幸いにも生きてた。

しかし、早く治療しないと危険な状態だった。

「私がやります。それでも、少し魔法が使えるんです。」

フィリアが男の子を抱えて行った。

僕は隊長を睨みつけた。

「なんだお前は、勝手なことをして。あんな小僧の一人や二人どうだっていいだろう。ここに来る途中にあった村など我々に従おうとしないから2、30人は斬り殺したぞ。」

許せなかった。

僕の中からふつつつと怒りが沸いてきた。

気づくと僕は隊長を殴っていた。

隊長は吹っ飛んで兵隊の中に突っ込んだ。

「お、お前。こんなことをしてどうなるか分かっているのか！名を名乗れ！」

「僕は、聖クリス王国第18代王位継承者ダイスケだ。」

僕は自分でもなぜかは分からないけど、自分が王子であると言っていた。

6 旅立ちの時

6 旅立ちの時

そして、僕が王子だと知り、僕を捕らえようとする兵隊達と戦いが始まった。

僕は、30人の兵隊に囲まれながら戦っていた。

正直つらくなってきた時、僕を助けようと村の元騎士団の大人達が加勢に来てくれた。

そうなれば、もう力と人数の差で押し切った。

兵隊達はすぐに逃げ出した。

その夜、村の大人達と僕はカーネルさんの家で話し合いを始めた。

「どうする、やつらはまたすぐにやってくるぞ。」

「森のもつと奥に行けば見つからないだろうが・・・」

大人たちもかなり悩んでいる。

「王子、どうすればいいと思いますか？」

一人の言葉がきっかけとなり、皆は僕の方に視線を集めた。

皆は僕に決めてほしいということみたいけど……

「僕は……」

僕はあれからずっと考えていて、自分がどうするのかを決めていた。

「僕は明日、村を出てアルス王国に行こうと思う。」

大人たちの間にざわめきがおこる。

「王子、我々を見捨てるのですか。」

男が悲痛な声をあげる

「そうじゃない。僕はこの世界に来て自分がなにをするべきなのか、ずっと考えていた。ヴァンガ王国が世界を統治することで平和になるのならそれでもいいと思ってたんだ。でも、今日のあの兵隊達を見て分かったんだ。このままじゃ平和にはならないって……。僕が元の世界に戻るのに選べる道は二つだった。ヴァンガ王国と戦って倒すか、ヴァンガ王国に取り入るか……。でも、僕はあんなことをするやつらに取り入ろうとすることなんてできない……。だから、僕はアルス王国に行き、アルス王国にあるという聖クリス王国の聖剣アルファートを抜くことで僕が聖クリス王国の王子であることを証明して、ヴァンガ王国と戦うために力を借りようと思う。」

大人たちはお互いに顔を見合わせると頷いた。

そして、カーネルさんが立ち上がった。

「皆、私達も、もう一度立ち上がってみないか。また聖クリスの名の下に剣を握ろうじゃないか。」

カーネルさんの言葉に続々と大人たちは立ち上がった

「そうだな。もう一度やってみようか。」

「ああ、聖クリスの旗を王都に掲げよう。」

みんなは盛り上がってそのまま酒盛りになってしまった。

「あゝもう、みんな大酒飲みなんだから、少しは遠慮してくれないと……。」

僕は飲みすぎで気分が悪くなって外に出た。

「本当に良かったんですか…….?」

フィリアが心配そうな顔で僕を見ていた。

「良かったって何が?」

「このまま、森の奥に村を移せば、おそらくもう見つかることはないでしょう。そうすれば、ずっと平和に暮らすことができます。」

「良かったんだよ。僕は待たせている人達がいるからね。それより、村の皆は僕を手伝ってくれようとしているけど……僕はそっこの

ほうが良かったのかなって思うよ。」

「ダイスケさんが来るまで、皆希望を失ってたんですよ。戦争に負けて、王様達もいなくなつて、国を奪われ……。そこにダイスケさんが来たんです。皆はあなたに希望の光を見た。あなたは皆の希望なんです。」

そこまで言われると照れるけどうれしかった

「そつか……。それじゃあ、僕は明日の朝には出発するからもう寝るよ。おやすみ。」

「はい、おやすみなさい。」

なんだか、少し胸の中のもやもやが取り払われた気持ちになった僕はベッドに入るとぐっすりと寝ることができた。

朝、僕が出発しようとする、村の入り口まで村の人みんなが見送りに来てくれた。

人だかりの中からカーネルさんが一歩前に出る。

「それでは、王子。我々も引越しの準備の済み次第アルス王国に行きますので……。お気をつけて。」

「うん。先に行ってアルス国王に話をつけとくよ。地図ももらったし大丈夫だよ。」

ばくがそれじゃあと言ってみんなに手を振り出発しようとする

「待ってください！」

人だかりの中から荷物を持ったフィリアが出てきた。

「私も連れて行ってください。お願いします。」

突然のフィリアの言葉に驚かされた。

「フィリア、それはできないよ。」

フィリアを連れて行くわけには行かない。

僕は旅に慣れてもないから危険だし、カーネルさんたちと来たほうが安全だろう。

「どうして！決して迷惑はかけません！ですから！」

フィリアは僕に詰め寄ってきた。

僕はフィリアの必死な態度に押されて何も言えなくなった。

「王子、フィリアを連れて行ってはもらえませんか・・・」

カーネルさんの意外な言葉に僕は驚いた。

「フィリアは魔法も使えるし、料理もできる、きっと役に立つはずです。フィリア、お前も王子が心配だからついていきたいと言った

らどうだ？」

僕はフィリアの方を見た。

フィリアは顔を背けながら

「だって、ダイスケさんまだまだこの世界のこと何も知らないのに・
・・」

と言った。

フィリアの気持ち嬉しかった。

正直心細かった。

「フィリア・・・・ありがとう。」

「はい。」

僕がそう言つとフィリアは顔を上げて満面の笑みを見せてくれた。

そして、僕達はみんなの見送りを受けて出発した。

7 深き森に住みし魔女

7 「深き森に住みし魔女」

日が暮れようとしている。

村を出てずっと歩いてきたが森の出口はまだまだ見えない。

「フィリア、まだ出口は先なの？」

フィリアはもう大分疲れているようで肩で息をしている。

「はい・・・まだみたいです。」

今日は野宿かと思って寝るのによさそうな場所を探していると、木々の合間から光が見えた。

もしかすると、山小屋か何かかもしれないと思い、フィリアを連れて近づいてみると

「家・・・誰か住んでるのかな？」

それは小さな民家だった。

もしかしたら泊めてもらえるかもしれないと思い、近づくと

「もうじき雨が降る。早くお入り。」

中から女性の声がした。

どうして僕達のことがかつたのかと思い驚きながらも恐る恐る中に入った。

中では妙齡の女性が暖炉の前のイスに座っていた。

桃色の長髪にすらつとした体、そして人間とは違う尖った長い耳。

「ダイスケにフィリア。よく来たね。」

女性はこっちを向いて言った。

「なんで、僕達の名前を知っているんですか？」

「まあまあ、話すことはたくさんある。ほら、お座り。」

驚いて言った僕の言葉に女性は落ち着き払った声で言った。

僕達は言われるがままにイスに座った。

外から雨の音が聞こえ始めた

「それで、さっきの質問なんですが……」

「私はなんだって知っているさ。あんたの父親セイの子供時代も、あんたが違う世界から来たことも……私は、何百年もの時を生

きているからね。そうだ！エルの譲ちゃんは元気かい？」

女性の言葉に驚きを隠せなかった。

そして、

「あなたは・・・何者なんですか・・・」

こう言うのが僕の精一杯だった。

「魔族・・・って知っているかい？」

「まぞく？」

「ダイスケさん。魔族というのは、この世界に太古の昔より存在し、人間よりも遥かに強力な力を持ち、人間と幾度も戦争をして人間を何度も滅ぼそうとした種族です。しかし、その残忍な行いを見咎めた女神によって魔界と呼ばれる世界に封じ込められたと伝えられています。」

疑問の表情を浮かべている僕にフィリアが助け舟を出してくれた。

女性は一度頷くと口を開いた。

「昔、ある魔族の女がいた。魔族の女はどうしても人間が嫌いになれなかった。女は人間と共存する未来を夢見ていた。しかし、ついにその時が来た・・・女神は魔族を魔界に封じると言った。次々と仲間が封じられる中、女は『自分は人間が好きだ。この世界の行く末を見ていたい』と懇願した。女神は女に魔女として人の世界を見守り続けるという使命と世界を見渡す力と少しの未来を視る力を

与え、女を一人、この世界に残した……」

「……辛くなかったんですか、一人残されて……」

「確かにそう思ったこともあった……でも、私はまだ探しているんだ……人と魔族の共に生きる道を……それに、慣れればこの生活も悪いものではない。時々はエルのような神殿の巫女も遊びに来る。」

「人と魔族の共に生きる道……」

僕は少し考え込んでしまった。

「さあ、あんた達、旅は長いんだそろそろ寝な。」

僕らは寝室へ案内された。

僕は、どうにも寝付けなくて暖炉のある部屋に來ると、女性はまだ起きていた。

「眠れないのかい？」

こちらを見ずにイスに座ったまま女性は言った。

「はい……あの、少し聞いていいですか。」

「なんだい？」

「僕の友達は、無事ですか？」

ずっと気になっていたことを聞いた。

世界を見渡す目を持っているというこの人なら知っているだろう。

女性は少しため息をついて言った。

「エルから伝言を預かっている。二人を止められませんでした、すみません。どこにいるのかも分かりませんが私も責任を持って探します。本当にすみません・・・と。エルは甘いところがあるからね、おそらく二人の頼みを断りきれなかったというところだろう。」

僕は絶望した。

こんな世界に僕と同じように放り出されたのだとすれば、もしかすると二人はもう死んでいるかもしれないと思った。

「安心しな。二人ともまだ生きてるよ、まあどこにいるのかは私にもわからないけどね。」

女性は僕の気持ちを察して言った。

僕はひとまず安心できた。

「でも、それはいつのことですか？」

「2週間ほど前のことさ。エルはそのことを伝えようと、あんたを探してくれと私のところまでやって来た。私には少しだけ未来が視えると言ったね。私にはあんたがここに来る未来が視えていたから

ね、あんたには私が伝えておくと言っておいたのさ。」

二週間前か、それだけ前から来ていて無事ならどこかに匿ってもらえているのかもしれない。

僕は心配事が一つ解決すると、緊張の糸が切れたようで眠くなった。

僕があくびをすると女性は

「さあ、そろそろ寝な。じやないと朝が辛いよ。」

僕はお礼を言うと寝室に向かった。

朝、雨も上がっていて出発にはいい天気だった。

女性は僕達を見送りに家の前まで出てきてくれた。

女性は僕の顔を見ながら真剣な面持ちで言った。

「私にはあんたの旅がどうなるのかまでは視えないけど、あんたは辛い事実と向き合うことになる。それはきっと絶望するには十分なほど辛いことだ。でも、絶望してはいけないよ。あんたが立ち止まればその分救えるものも救えなくなる。大丈夫、女神はあんたと共にある。」

最後には初めて笑顔を見せてくれた。

僕達はお礼をすると出発しようとした。

だが、僕は一つ聞き忘れたことがあるのを思い出した。

「最後に一つ聞いていいですか。」

「なんだい？」

「あの、あなたの名前は何って言うんですか？」

女性はため息をつきながら少し笑って

「サラ。魔女のサラ。」

と言った。

「ありがとうサラさん。」

僕達はサラさんにもう一度お礼を言いながら出発した。

8 森を抜ければ

8 「森を抜ければ」

サラさんの家を出発して数時間ほど歩いた。

その間に、いろんな話をした。

僕達の元の世界についても話した。

そして、僕の友達二人が神殿からこの世界に来てしまったという話をすると

「そうですか、友達がこちらに……無事でしょうか？」

と、まるで自分のことのように心配をしてくれた。

「サラさんが言うには、今は無事らしい。僕は待っててほしいって言ったのに、大人しく待っててはくれなかったよ。」

と、僕は少し笑いながら話した。

僕も少しは心配をしていたが、あの二人なら僕よりもずっと頼りになるから大丈夫だろうと今は安心していた。

「無事ですか、それは何よりです。友達の方々が大人しく待っててくれなかった理由は少し分かる気がします。」

「え、なんで？」

「だって、あなたってなんだか放っておくと心配になるんですよ。きつと友達も心配だったんですよ。」

フィリアは少し照れたような笑顔でそう言った。

「そうかな？僕は一人でもなんとか頑張れると思うんだけど・・・」
僕は自分が頼りないのかと思って心配になった。

「そういうところですよ。誰にも迷惑をかけないようにと、自分一人で何とかしようとする。もっと人を頼ってください。」

と、フィリアは僕を諭すように言った。

「でも、僕一人でできることなら僕一人でやったほうがいいでしょう？このことだって、僕だけなんとかできれば・・・」

二人を巻き込まなくてすむ、と続けようとした僕の声を

「それは違いますよ。今、あなたが進もうとしている道はきっと大きな悲しみや辛いことが待っているでしょう。もしかすると、あなた一人でも、友達の力を借りなくてもなんとかできるのかもしれない・・・でも、たくさんの人と同じ道を歩めば、悲しみも辛さもみんなで分かち合うことができます。」

フィリアの言葉がさえぎった。

フィリア表情からは心配をしてくれているというのが容易く読み取れた。

「わかったよ。無理はしないよ。」

と、僕はフィリアが心配してくれているのを嬉しく思いながら言った。

「わかってくれればいいんです。さあ、もう少しで森を抜けます。」

フィリアは笑顔になって僕の前を歩き出した。

そして、それから歩くこと数時間

ようやく森の終わりが見えた。

そして、森を抜けると

一人の、大きな槍を携え馬に乗った騎士がいた。

9 迫り来る魔の手

9 「迫り来る魔の手」

森を抜けた草原に悠然と存在する騎士

なぜか僕達は足を止めていた。

もしかすると、本能的な危機を感じたのかもしれない。

どちらも言葉を発することは無く

草原には風になびく草の音と、騎士の甲冑が立てるがちゃりという音だけが聞こえた。

そして、しばらくすると静まり返った草原に、騎士の低く、しかし決して聞き取りにくいわけではない威厳のある声が響いた。

「悪いことは言わない。即刻に森の奥に戻るが良い。」

騎士の声からは威圧的な感じは受けなかった。

何か言葉と感情の一致しないような違和感を感じた。

「その前にあなたは何者なのか教えてくれませんか？」

その騎士が何者なのか。

僕はまずそのことを確かめたかった。

僕達を森に帰らせようとしているということは、僕達が何者なのかを知っている可能性がある。

「私はヴァンガ王国の特務騎士レイザー。主の命を受けて参った。」
最悪のパターンだった。

ヴァンガ王国に僕が生きていることを知られているのは仕方ないがまさか、こんなにも早く追っ手が来るとは思っていなかった。
というか、おかしい。

ヴァンガ王国の兵隊を追い払って4日も経ってない。

どう考えてもヴァンガ王国の兵隊が国に戻り、王に報告をしてレイザーが追っ手として来るのには早すぎる。

もしかすると・・・

「その表情から察するにどうやら気づいたようだな。そうだ、私はお前達に追い払われた兵が国に戻るより前に既に国を発っていた。」

どうして、僕達が森にいることがわかったのか・・・
なぜ、僕を殺さずに森に帰らせようとするのか・・・

僕は疑問が多すぎて訳が分からなくなってきた。

「どうして、お前が森にいたことがわかったのか。どうして、殺さずに森に帰らせようとするのか。疑問は大方そんなところだろう。」

どうやら僕の考えはお見通しらしい。

なら、もうこつちも変に考えこむ必要は無い。

「ええ、その通りです。理由を教えてくださいませんか？」

「なぜ、森にいたことが分かったのか。それは、我が国には魔女とまではいかぬが、人を探すことにかけては魔女にも引けをとらない魔術師がいるというのが答えだ。お前達が村を出たのを知り、私は急いで駆けつけた。そして、なぜ殺さないのか……それは答えるわけにはいかない。主の命だからな。」

それは、相手に僕達の行動が見張られていることを意味した。

どこにいたのかが分かるのなら追っ手は幾度と無く送られてくるだろう。

そして、レイザーの言動から一つのこと予想できた。

それは

「あなたは王の命令で来たではありませんね。」

レイザーが王の命で来たのならおかしいところが二つある。

一つは、僕を殺さないこと。

ヴァンガ王国の王なら僕のことは殺すか自分の所に連れて来るかどうかだろう。

もう一つは、レイザーが主の名前を言わないこと。

王の命令なら主が王であるといことは隠す必要も無いだろう。いや、それどころか誰の命令でも大丈夫なはずだ。レイザーは僕を森に帰すつもりなのだから知られても問題にはならないはずだ。

つまり、レイザーの主は王ではなくて、なおかつ僕に名前を知られるわけにはいけない人物ということになる。

「なるほど、なかなか頭が回るようだな。そうだ、私は王の命で来たわけではない。さあ、そろそろおしゃべりの時間は終わりだ。森に戻るが良い。」

レイザーは槍で森を指す。

やはり、その言葉から威圧的な感じは受けない。

「そんなことできません！私達は行くって決めたんです。誰がなんと言おうと引けません。」

フィリアが反論する。

確かに引くわけにはいかない。

僕とレイザーはしばらくの間睨み合った。

少しの時間が長く感じられた。

やがてレイザーが口を開いた。

「なら、力づくでも森に戻ってもらおうか。」

レイザーは槍を構えた。

ピリピリと皮膚が焼けるような感じが体に走った。

フィリアに後ろに下がっているようにと指示を出し、剣を構えた。

そして、レイザーが馬を走らせ僕に向かって突撃してきた。

10 騎士の決意、譲れぬ想い

10 「騎士の決意、譲れぬ想い」

馬に乗り突撃してきたレイザーは槍を突き出してきた。

レイザーの槍に合わせて剣で受け流す。

手に痺れにも似た感覚が走る。

槍の一撃は想像以上に重く、何度も受けられるものではなかった。

しかし、レイザーは馬を翻し突撃を繰り返してきた。

何とか受け流すが、二度三度と受け流すと手が痺れてきた。

馬に乗っているため、僕の剣はレイザーを捕らえられなかった。

「大地の精霊よ。大いなる大地よ。私の願いを聞き届けたまえ。」

フィリアが後ろで声を上げた。

すると、レイザーの馬の前方の地面がかなり盛り上がった。

盛り上がった地面につまづいて馬は転倒した。

レイザー自身は重装備ながらも易々と着地する。

「ちつ、魔法が使えたのか。」

レイザーは馬から下りたら大槍と動きにくい重装備は不便だと思ったのか忌々しそうに槍を捨てると、兜と肩当てをはずし、腰に差しである剣を抜いた。

兜をはずし、レイザーの顔が現れた。

金の髪が風になびき、赤い目がこちらを見据えた。

剣を構えて駆け寄ってくる。

そして、間合いに入ると鋭い斬撃が襲い掛かった。

ガキン

剣と剣がぶつかる。

どちらも負けじと押し合った。

「大人しく戻ってはくれないのか！」

レイザーが怒りと言うよりは悲痛な頼みを叫んだ。

レイザーの剣に更に力がこもった。

「それはできない！僕にはやらないといけないことがあるんだ！」

負けじと言い返し押し返す。

それと同時にレイザーは力を抜いて飛び下がる。

そして、力みすぎていたためにバランスを崩した僕に斬りかかった。

「お前は何もしなくていい！私の主が全てを解決してくれる！」

「駄目なんだ・・・それじゃあ、駄目なんだ！もう僕には守らないといけない人たちがきたんだ！守るって決めた世界があるんだ！だから僕は、行くんだ！」

何とか受け流して体制を整える。

そして、お互い一定の距離をとって向かい合った。

お互い次の一撃で終わらせようと動きを探り合う。

「なら、もう何も言うまい。」

じりじりと歩み寄り距離を詰めていく。

一瞬の隙が命取りになる緊張から、額に汗が浮かんだ。

そして、ついにお互いの間合いに入った。

「うわあああ！」「うおおおおお！」

お互いの必殺の一撃が交差した。

そして、ほぼ同時に放たれた一撃の戦いを制したのは僕だった。

僕の踏み込みが半歩分深かったことが決定的な差となった。

その一撃はレイザーの胸当てに当たり、命を奪うには至らなかったが胸当てはへこみ、肋骨が折れる音がした。

レイザーはどさりとその場に倒れた。

僕は急いでレイザーのそばに駆け寄った。

「大丈夫ですか！」

僕はレイザーに声をかけた。

レイザーはしんどそうにこっちを見て

「とどめを刺せ。」

と言った。

「馬鹿なことを言わないでください！自ら死を選ぶようなことはやめてください！」

僕は愚かな発言に感情が昂ぶった。

「私はお前達の敵だぞ。」

レイザーは辛そうな声で言った。

もしかすると、この世界では騎士が負けて生き残るのは恥なのかもしれない。

だが、それでも誰にも死んでほしくなかった。

「敵とか味方とか・・・全部それだけで見ていると悲しいじゃないですか。確かに戦場で会えば殺しあうことになるかもしれませんが、でも、あなたあなたなりに僕達のことを思ってこんなことをしたんでしょう？なら、あなたを殺す理由なんて無いじゃないですか。そうでしょう？」

僕がそう言つと、レイザーは深いため息をついた。

「甘いな。俺は、また来るぞ。お前達が森に帰るまで・・・」

「その時は・・・その時です。」

と僕は笑いながら言った。

「なら、もう行け。この程度数時間もあれば動けるようになる。」

レイザーも少し笑ったような顔で言った。

「フィリア、魔法で怪我って治せるの？」

フィリアはいつの間にか傍まで来ていて、僕がそういうのをまるで見越していたように

「はい。」

と笑顔で言った。

どうにも敵わない。

レイザーの治療はすぐに行われ、どうやら2、3時間もあればある程度の激しい運動をしても大丈夫らしい。

僕達はレイザーに別れを告げると旅を再開した。

そして、二人が去った後

「甘いな、甘すぎる。主の言うとおりのやつだ。あれは戦乱を生きるには優しすぎる………」

レイザーは仰向けになって空を見ていた。

まだ折れた肋骨も少し痛むが、なんだか清々しい気分だった。

「でも主………あんなバカがつくようなお人好しが、少し……うらやましいと思ってしまいましたよ。こんなこと言ったら、あなたはどつ言っんでしょね………」

レイザーはそのときの主を想像する。

そして、しばらくするとプツと笑い出した。

「そうですよね……あなたはきっと俺もだと言っただけでしょうね。」

レイザーは立ち上がり傍で待ち続ける愛馬に乗った。

「もし、あなたと会う前にあいつに会っていたら……」

レイザーは、そつつぶやくと王国に向けて馬を進めた。

誰もいなくなった草原には、風に揺られる草の音だけが聞こえていた。

11 アルス王国到着

11 「アルス王国到着」

レイザーとの戦いから一週間歩き続けてようやくアルス王国に着いた。

アルス王国の城下町は活気に満ち溢れていて、

自分がアルス王国に戦を持ち込むのかもしれないと思うと少し気が滅入った。

「ダイスケさん。さっそく王様に謁見しに行きましょう。」

フィリアは騎士団長の娘として幼いころに何度か来たことがあるらしく、王様にも何度か会ったことがあるらしい。

元気いっぱいのフィリアに引き連れられて城まで案内された。

城の中に入ると、まずは王様に謁見するためにアポを取らないといけないらしく受付に向かった。

受付の女性に謁見がしたいと言うと、女性は顔を上げフィリアを見ると目を見開いた。

「もしかして、聖クリス王国の騎士団長様の娘のフィリア様ですか？」

どうやら、受付の女性はずいぶん前から受付の仕事をしているらしく、フィリアのことを覚えていたみたいだ。

女性はフィリア様なら、きっと王様もすぐに謁見してくれるはずと言って王様に報告に向かった。

「なんだから、緊張するね。」

僕はとても緊張していて、手には汗がにじんでいた。

よく考えると僕自身は王子だったことを何も覚えていないのだ。

本当に僕が王子だったのかと聞かれても僕には分からない。

もしかすると、違うのかもしれない。

そうフィリアに悩みを打ち明けると

「そのことを悩んでいたんですか。確かに今はまだあなたが王子だと証明できるものは何もありません。でも、だからこそ今からそれを証明しに行くんでしょう？それに、あなたが王子じゃなかったとしても誰もあなたのことを嫌いになったりしませんよ。」

きっとフィリアは僕が王子じゃなくても何も言わずに傍にいてくれるのだろう。

そう思うと気分が楽になった。

しばらくすると、受付の女性が戻ってきて、王様が今から謁見して

くれていると言っていると言った。

僕達は緊張しながら玉座の間に向かった。

玉座の間に入ると、左右には兵士がずらりと並んでいて玉座には王様と横には王妃様がいて、さらにその横には大臣と思われる人物がいた。

王様は40歳ぐらいの大きな人で、あごには白いひげが伸びていて威厳に満ち溢れた人だった。

王妃様も40歳ぐらいなのだろう、未だに美しいと十分言えるだけの美貌を持っていて優しい感じのする人だった。

僕達は王様の前に歩いていき頭を下げた。

「おお。フィリアか久しぶりに会ったが、大きくなったな。」

「お久しぶりです王様。両親も王様によろしくと申しておりますた。」

王様は満足げに頷くと僕のほうに視線を向けると、目を見開いて

「セイ……」

と呟いた。

王妃様も僕を見て相当驚いているようだ。

「王様、こちらは聖クリス王国の王子ダイスケ様です。」

王様は驚いていたが少しすると真剣な面持ちでこう言った。

「それで、用件はなんなのだ？」

僕は勇気を振りしぼって一歩前に出て

「僕にヴァンガ王国と戦うための力をお貸しください。」

と言った。

王様は少し微笑ましそうに

「その話をする前に君に合わせたい人物がある。ほら、出てきなさい。」

と言った。

そして、玉座の間の横にあるドアが開いた。

そこから、出てきたのは見覚えのある顔

僕が何とかすると約束した相手

「ユキ・・・ちゃん・・・」

12 再開、聖剣

12 「再開、聖剣」

扉を開き出てきたのは間違いなくユキちゃんだった。

「ダイスケ！無事だったのね！」

ユキちゃんは駆け寄ってきた。

お互いの再開を手を取り合って喜んだ。

「ユキちゃんも無事でよかったよ。でも、なんでユキちゃんがここに？」

「それはね・・・」

ユキちゃんの話によると

鏡を抜けてこっちの世界に来たユキちゃんは城下町で気を失っているところを町の人に見つけられたらしい。

城下町で他の人に異世界から来たと話をするも信じてもらえなかったが、うわさを聞いた王様がユキちゃんを呼んで話をしたところ、王様もエルさんと面識があるらしく兵を使って僕を探してくれると言い、僕が見つかるまで城に住むように薦められて今に至るという

ことらしい。

どうして王様がエルさんと面識があるのかと不思議に思ったが、王様が言うには年に一度の女神を祀る祭には神殿の巫女が来て祝詞を捧げるのが慣わらしい。

「で、ダイスケは今までどうしてたの？」

僕は今まであつたことを全て話した。

ユキちゃんは話を聞き終わると真剣な表情で

「なんで、私達を置いて行つたの？」

と言った。

視線を僕に合わせて離そうとしない。

「僕は、二人を巻き込まないようにって思つて・・・」

「ダイスケがこっちの世界の人間だから、だから置いていったて言うの？巻き込まないように？あんたはそれで私達が喜ぶとも思つたの？」

眉を吊り上げて僕を睨みつけてくる。

「喜んでくれなくても、怒られても、二人を危険な目に遭わせたくなかったんだ！」

僕も負けじと言い返した。

「私達を危険な目に遭わせたくなかった？」

ユキちゃんは次第に声のトーンを低くしていった。

最後には眉も下がり泣きそうな顔になった。

「そんなの、私達だって同じよ！あんなだけを危険な目に遭わせたくないわよ！」

ユキちゃんは僕に抱きついて大声で泣き出した。

その泣き声は玉座の間に響き渡った。

「ごめん・・・ごめんユキちゃん。」

僕にはただ謝ることしかできなかった。

しばらくしてユキちゃんが泣き止むのを待って

「話を本題に戻すが、本当にヴァンガ王国と戦いたいのだな。」

王様は張り詰めた声で言った。

「はい。」

ユキちゃんは僕の決意を知ってか、これを止めるようなことはせずじっと僕を見ていた。

「しかし、君が本当に聖クリス王国の王子かどうか・・・これを確かめなくてはいけない。確かに君はセイにとてもよく似ている。まるで、若いころのあやつを見ているようだ。しかし、私も一国を預かる身なれば、念には念を重ねねばならん。」

王様の言葉は国を預かる人間としての責任感がうかがえた。

王様が大臣に何かを言々と大臣は隣の部屋から一振りの刀を持って来た。

「これが聖剣アルファート。ある兵士によつて聖クリス王国から持ち出され、私に届けられたものだ。知っておるだろうが、これを抜けるのは聖クリスの血を引く人間のみ。君が王子なら、これが抜けるはずだ。」

大臣は僕に聖剣を丁寧に手渡した。

聖剣は見かけよりずっと軽く、まるで羽のようだった。

今、僕が王子かどうか試されている。

そう思うと緊張で手が少し震えた。

剣の柄を持ったまま、勇気を出すことができない僕を見て

「大丈夫ですよ。」

フィリアが横で微笑んで言ってくれた。

そして、そつと僕の手に自分の手を重ねた。

「ありがとう。」

と僕は呟いて勇気をだして手に力を込めた。

抜ける

僕が力を込めると剣はすらりと鞘から抜け出た。

それは聖剣というのにふさわしい、吸い込まれそうな輝きを持っていた。

嬉しくて隣のフィリアのほうを見ると

フィリアは、ほらねと言わんばかりに微笑んでいた。

13 王の決意と旅の続き

13 「王の決意と旅の続き」

「きれい・・・」

隣のフィリアが声を漏らした。

周りの兵士達からも賞賛の声が聞こえる。

王は立ち上がり拍手を始めた。

「すばらしい。この剣の輝きを見たのもいつ以来か……。ダイスケ君、君が聖クリス王国の王子であると認めよう。」

周りの兵士達からも拍手が聞こえ始め、やがて拍手の音は玉座の間に響き出した。

僕は剣を納めると、王様に向き直り尋ねた。

「では、力を貸していただけののですか！」

王様は大きく頷いた。

「ああ、共にヴァンガ王国を打ち滅ぼそうぞ。君の両親で私の親友でもある二人の無念を晴らしてやろうではないか。」

王様の言葉に周りの兵士達からは歓喜の声が上がり始めた。

僕は頭を下げ、王様に礼を言った。

「戦の準備が整うまで長い時間がかかる。それまでは城に留まるといい。ここには君の友達もいることだし、もう一人の方も必ず兵達に見つけ出させよう。」

王様の言葉に僕は首を振った。

「僕は旅を続けて、力を貸してくれる人たちを探そうと思います。他の国を回り、他の種族を回り少しでも力を貸してくれる人たちを探したいんです。旅を続けていれば、もしかすると友達にも出会うことがあるのかもしれないですし……」

「そうか……なら、私にできることは何かあるだろうか？」

王様は僕をとて心配してくれているようで、隣の王妃様も僕のことを心配するような顔で見ている。

「それなら、他の国の王様に宛てて親書を書いていただきたいのと……僕の友達を守っていてください。」

「それはどうということよ！私も行くわよ！」

ユキちゃんが怒鳴りつけてくる。

でも、ユキちゃんを連れて行くわけにはいかない。

何があるのかもわからない旅だ、危険は多いだろう。

「また・・・また置いて行くの！」

僕の胸を叩きながらユキちゃんが叫ぶ。

「なんで・・・なんでよ！」

泣きながら必死に僕の胸を叩き続ける。

「もう待つのは嫌なのよ！怖いの！もしかしたらってことばかり浮かんできて怖いのよ！」

「ごめん。でも、これから行く国が決して僕たちに友好的だとは限らないし、他の種族だつてそうだ。それに、僕にはいつも追っ手がかかる。危険な旅なんだ・・・連れて行けないよ・・・ごめん・・・ごめん・・・待ってて・・・」

僕はユキちゃんの体を抱きしめて言った。

ユキちゃんは、始めは暴れていたが次第に体の力を抜いて僕に体を預けた。

「絶対、絶対帰って来るって約束して。」

「うん。約束するよ。」

ユキちゃんは黙って離れて元の位置に帰った。

王様はすぐに親書を書いてくれて、その上に旅の資金をどっさりとくれた。

その後は、例のごとく宴会となつて

僕達は歓迎の言葉と豪華な料理とお酒をお腹いっぱいご馳走になり、みんな宴会場でそのまま泥のように寝てしまった。

みんなが宴会場で倒れて寝ている中、僕は一人起き上がった。

宴会場の片隅に置かれてある荷物を取り、部屋を出た。

部屋を出て、そのまま城の外に出た。

「君は、それでいいのか？」

後ろから王様の声がした。

振り返ると城壁にもたれかかった王様の姿があった。

きつと僕の行動を見越して外で待っていたのだろつ。

「はい。これが一番いいんです。誰も危険な目にはあわせないには僕が一人で行く、これがきつと正しい方法なんです。」

「正しいかどうかは私には分からないが、君はもっと人を頼るべきだと思つぞ。」

どこかで聞いた言葉。

思わず笑みがこぼれた。

「前にも言われました。」

「そうか、だからか……」

王様の言葉に少し疑問を感じて首を傾げた。

僕の表情に気づいたのか

「君が頼ろうとしないから、みんな君に無理にでも親切を押し付ける。もっとも君はそれに気づいていないようだがな。」

と、王様は顎で城壁の上を見るように合図をした。

城壁の上を見ると

「ユキちゃん……」

ユキちゃんがいた。

ユキちゃんは心配そうにこっちの方を見ていた。

きつと話をずっと聞いていたのだろう。

「行ってきます。」

と僕が言つと

「いってらっしゃい」

と笑顔で手を振ってくれた。

王様の方を見るとほらねとでも言わんばかりの顔だった。

僕はそろそろ出発しようと思い王様に背を向けた。

「フィリアとユキちゃんのことを頼みます。」

僕がそう言って歩き出そうとすると

「ユキのことは任せるといい。フィリアに関しては私の出る幕は無いと思うが、できる限りのことはさせてもらおうよ。」

と含みのある言葉が返ってきた。

僕はその言葉に疑問を感じながら歩き出した。

そして、城下町の門を通ったときに言葉の意味を知った。

「まさか、私まで置いていくつもりなんて言いませんよね。」

まったくつくづく僕の行動はみんなに見透かされているようだ。

門の外で荷物を持って僕を待っていたフィリアを見ると、なんだかもう肩の力が抜けてため息が出てきた。

「君は本当におせっかいなんだね。」

と皮肉を言うことが精一杯だった。

「あなたがもつと頼ってくれたらおせっかいを焼く必要もなくなるんですけどね。」

と笑って返された。

そして、お互いの顔を見てぷつと笑うと

僕らは新しい旅の一步を踏み出した。

14 騎士再来

14 「騎士再来」

アルス王国を出て3日間がたった。

旅を再開した僕たちは最初にレザビア国に向かうことにした。

レザビア国は今もなおヴァンガ王国に従っていない国のうちのひとつで聖クリス王国とは友好関係を持っていたらしい。

レザビア国はかなりの国力を持っていて、力になってももらえるのなら心強い。

レザビア国に行くにはガラクの谷というところを通らないといけないらしく、僕たちは谷に向かっていた。

「フィリアはレザビア国王にも会ったことがあるの？」

「いえ、レザビア国王とは面識が無いんです。」

フィリアがレザビア国王と面識があればよかったのだが仕方ない、アルス国王にもらった親書と聖剣アルファートでどこまで話を有利に運べるかが問題だ。

「ユキさん平気でしょうか・・・連れてきてあげなくてよかったんですか？」

「ユキちゃんなら大丈夫だよ。それに、もしリヨウくんが見つかったとき迎えてあげる人がいないといけないでしょ。」

フィリアは友達を差し置いてついでに負い目を感じているようだ。

そんなことにしないでいいんだけど、きっとそれはフィリアの優しさから来るものなんだろう。

「ねえ、カーネルさん達もそろそろアルス王国に着いたかな？」

「たぶん、そろそろでしょう。」

カーネルさん達のことはアルス国王に言っているから大丈夫だろう。だが、正直カーネルさん達に何も言わずにフィリアを連れてきてよかったのだろうか。

僕がフィリアにそう尋ねると

「大丈夫ですよ。それどころかお父さんがいたら、たぶんお父さんもついて来てますよ。」

とフィリアはふふつと笑った。

考えてみると確かについて来そうだ。

確かにカーネルさんがいれば頼りになっただろうが、戦争の準備のためにカーネルさんにはアルス王国に居てもらいたい。

そうして、しばらく行くと遠くにガラクの谷が見えた。

ガラクの谷の近くまで来た僕たちは、谷の入り口に馬がいることに気づいた。

そして、その横の岩には金の髪を持つ騎士の姿。

どうやら、僕たちのことを先回りして待ち伏せしていたらしい。

レイザーは僕たちに気づくと立ち上がって口を開いた。

「よう。久しぶりだな。」

それは、再開を喜ぶ言葉でも何でもなく。

ただ、これから起こる戦いを暗示していた。

15 守るべきもの

15 「守るべきもの」

「お前、アルス国に行ったみたいだな。それが、聖剣アルファートか。」

レイザーは剣を抜いて歩み寄ってくる。

僕もアルファートを抜いて構える。

二人の間に一定の距離が保たれた。

そして、最初に先手を打ったのは僕だった。

腕を狙った僕の一撃を払い、レイザーは反撃をしてきた。

お互い防いで反撃に出る攻防が続けた。

「大人しくついて来い！悪いようにはしない！」

「嫌だ！僕はレザビアに行かないといけないんだ！」

またレイザーと一定の距離が保たれた。

「戦争が終わるまで・・・世界が平和になるまでヴァンガ王国にいればいいだけだ！お前がしなくても世界は平和になる！」

「なら、今僕がついていけば、アルス王国にいる人たちはみんな無事でいられるって言うの？」

「それは・・・無理だ。しかし、それは不可避の犠牲だ！犠牲を出さずに何かを成すことはできない！」

レイザーは苦々しそうな顔で叫んだ。

そして、僕に向かい剣を振り下ろした。

「確かに、僕がしようとしていることも、たくさんの命を奪うことには変わりはない。でも、それでも、あそこには僕を待っていてくれる人がいるんだ！」

僕はレイザーの剣を払って反撃を繰り出す。

レイザーはそれを避けると一定の距離をまた保った。

「なら、お前は何故戦いを選んだ。お前が待ち人を連れて逃げればいいだけの話ではないのか。もともと、お前の事情も多少は知っている。だが、ヴァンガ王国に来ればお前達を帰してやることぐらいできるかもしれない。待ち人を連れてヴァンガ王国に来る。それじゃあ、いけないのか？」

レイザーは僕たちの事情をどこまで知っているのだろうか。

疑問は残るところだが、今はそれどころではない。

「元の世界に帰る・・・確かに少し前までの僕なら喜んでそうした

と思う。でも、今は帰るだけじゃあいけないと思うんだ。僕は僕なりにこの世界の人々と関係を持って、いくらかの人々の進む道を決めてしまった。」

僕は、僕のせいで戦いの道を進むことになった村の人々やアルス国の人々を思い浮かべる。

本当ならみんな平和に暮らしていたのかもしれないのに、僕はみんなを戦に巻き込んでしまった。

そうだ、だからこそ

「だからこそ僕はここで自分だけ逃げるわけには行かないんだと思う。」

「そうか……。お前は強いな。だが、俺も主のためにも退くわけにはいかない。」

僕たちはお互いの隙をうかがい始めた。

しかし、お互い隙を見つけることができず十分ほどたった。

極度の緊張からお互いの額には汗がにじんでいた。

そして、不幸にもレイザーの額から汗が流れ、目に入った。

思わず目を閉じてしまったレイザー。

時間にすれば1秒にも満たないが、それは致命的な隙となった。

すかさず斬りかかった僕の攻撃を捌ききれずレイザーの剣が宙に舞った。

2メートルほど離れたところに剣が落ちる。

僕はレイザーにアルファートを向けた。

レイザーは両手を挙げて降参の姿勢をとる。

僕はアルファートを下げた。

「また、とどめを刺さないつもりか？また俺は来るぞ。」

「ええ。できれば来てほしくはないですけど。」

僕はフィリアを呼んでその場を後にし、谷に向かって歩いていった。

二人が去った後、レイザーは弾かれた剣を拾い上げ鞘に収めた。

「また負けたか……とりあえず、主に報告しに行かないとな。」

そして、今なお自分を待ち続ける愛馬に近寄り、その体をなでる。

「主にしろあいつにしろ、なんで目指すものは同じなのにこうまでぶつかり合わなければならないのか。」

そして、馬に乗るとヴァンガ王国に向かって走り出した。

「でも、主。そう何度もあいつの所に向かわせないでほしいものです。なんだか、あいつと関われば関わるほど、あいつについて行きたい。そう思わされてしまうんですよ。本当に不思議なやつですね。」

16 ガラクの谷

16 「ガラクの谷」

ガラクの谷はいたるところに岩があつてとても歩きにくかった。

「谷には魔物がいるという噂もありますから気をつけてくださいね。」

「

フィリアはそう言っていたが、今のところ魔物どころか生き物の姿は何一つ見当たらない。

まあ、用心するに越したことは無いけど、ここまで生き物が見当たらないなら気合の入れようも無い。

時折こけそうになるフィリアを気遣いながらも前に進んだ。

そして、谷の中ほどまで来たころ

奥のほうから何かの生物の雄たけびが聞こえた。

そして、それとほぼ同時に人の叫び声が聞こえた。

それを聞いた僕たちはお互いに顔を見合わせると谷の奥に急いだ。

声を追って来るとそこには

大きな、20メートルはありそうな体の、大きなはさみのついたムカデのような生き物と、しりもちをついている少し小太りな男がいた。

急いで男の前に出て下がるように言うと男は急いで岩の陰に隠れた。

僕はアルファートを抜いて巨大ムカデの攻撃に備えた。

少し離れたところでフィリアが援護をしようと魔法を放つ隙をうかがっていた。

巨大ムカデは目の前に現れた新しい獲物に襲い掛かってきた。

大きく口を開いたムカデは僕を狙って突撃してきた。

僕はそれをぎりぎりのところでかわした。

巨大ムカデは僕がいたところの後ろの岩にぶつかった。

岩はみごとに粉々に砕け散った。

一撃でもくらうと骨がこなごなに砕けるという危機感から気を引き締める。

巨大ムカデは身を起こすと、僕の方を向きなおして突撃を繰り返す。

僕はそれを避けて反撃の機会をうかがう。

その繰り返しが数分に及んだ。

疲れも出てきた僕は反撃の機会がつかがえずあせりを感じていた。

巨大ムカデの突撃をまた避けようとしたとき

巨大ムカデの下の地面が盛り上がったと思うと地面から岩の槍が伸び、巨大ムカデにめりこんだ。

フィリアの魔法がようやく発動したらしい。

「遅くなりました！後はお願いします！」

巨大ムカデは体を引いて暴れていた。

僕は巨大ムカデに向かってななめに伸びている石の槍を駆け上がり、巨大ムカデの頭に向かい跳んだ。

そして、アルファートは巨大ムカデの頭に深々と刺さった。

そして、さらに暴れだすムカデからアルファートを引き抜いて着地し、距離をとった。

しばらくすればムカデも死ぬだろうと思い、男のほうに向かった。

「大丈夫ですか？」

男はまだ少し震えていたが、僕のほうを見ると顔を輝かせて

「あ、ありがとうございます！助かりました！」

と喜んで僕の手を握ってきた。

そして僕がアルファートを鞘に収めた瞬間フィリアの叫び声が聞こえた。

フィリアのほうを見ると巨大ムカデが最後の力を振り絞って起き上がり、フィリアのほうを向いていた。

僕は駆け出した。

それと同時に巨大ムカデはおそらく最後になるであろう攻撃をするため、はさみを大きく開いてフィリアに突撃した。

僕は巨大ムカデより一歩早くフィリアの前に出た。

しかし、その次の瞬間、巨大ムカデのはさみが目の前に迫っていた。

なすすべもなく、僕の体は挟みあげられた。

体の骨が砕ける音を聞いた後、巨大ムカデの体から力が抜けて僕は開放された。

どうやら、巨大ムカデは死んだようだ。

僕はその場に倒れると、だんだんと意識が遠のいていく中で

男の駆け寄ってくる足音と

フィリアの僕の名前を呼ぶ声を聞いた。

16 ガラクの谷（後書き）

総表示回数が500を超えました。

みなさんの応援のおかげです。

ありがとうございます。

もし、よろしければ評価のほうもお願いします。

17 神の子の住まいし村

17 「神の子の住まいし村」

どれくらいの時がたったのだろうか

僕が意識を取り戻し目を開けると

僕はベッドに寝かされていて、その横ではフィリアと男が心配そうにこつちを見ていた。

「ダイスケさん！気づきましたか！」

「ここはどこ？」

まだ体中が痛いが何とか体を起こした。

体中には包帯が巻かれていた。

「ここは、サバナ村です。あの後、一刻を争う状態だったダイスケさんをすぐ近くのパーボンさんの村まで運んでもらったんです。」

パーボン、おそらくさっき助けた男の名前だろう。

「さきほどはありがとうございました。私はこの村で雑貨屋を営んでおりますパーボンと言います。あの時は、仕入れの帰りに不覚を取ってしまいまして・・・そういえば、お体の調子はどうですか？もう大部分は治っていると思うんですが。」

そういえば、体に痛みはあるものの体中の骨が折れているには痛みが無い。

「そういえば、ずいぶん楽だけど。どうして？」

「神の子の力ですよ。」

「神の子？」

聞き覚えの無い言葉に首を傾げた。

「村長の息子のことです。とてつもない魔力の持ち主で神の子と呼ばれているんですよ。村長の息子さんに事情を話すと魔法で治療をしてくれたんです。」

そうか、それで・・・

「その人にお礼を言いたいんだけど会いに行けるのかな？」

「ええ、それは大丈夫ですがもう歩いてても大丈夫なんですか？」

歩くくらいならもう大丈夫そうだった。

僕たちはバーボンさんに村長の家まで案内してもらった。

家に入ると、村長さんが出迎えてくれた。

そして、村長さんに薦められてイスに座った。

「どうも、この、村の長をしておりますイームと申します。この度はバーボンが命を救われたそうで、村長としてお礼を申し上げます。ていただきます。」

「いえ、そんな・・・そういえば、僕の怪我を治してくれた人に会いたいですけど・・・」

村長さんは頷くと、部屋の奥に入っていった。

そして、戻ってきた村長さんの横には12歳くらいの男の子がいた。男の子は肩口くらいまでの茶髪で身長は150くらいだろう、茶色の目が印象的なのとやわらかい感じする子だった。

「君が僕の治療をしてくれたの？」

目の前の小さい子が神の子？という気を拭えずにおそろおそろ話しかけた。

「別にたいした事じゃありません。村の人がお世話になったお礼です。気にしないでください。あ、僕アルアって言います。」

アルアは笑って返したくれた。

「僕はダイスケ。よろしくね。」

アルアは今度はフィリアに挨拶に向かった。

「あの子があんなに喜んでいるのを見るのは久しぶりです。この村には外から来る人は少ないですから・・・もし、よろしければ今

日は我が家に泊まっていただけませんか？あの子もきつと喜びます。

「

僕たちの話が聞こえたのかアルアは僕に詰め寄ってきた。

「本当ですか！じゃあ、村の外の世界の話を聞かせて下さい！」

アルアは本当に嬉しそうに言った。

「わかった。いっぱい聞かせてあげるよ。」

僕はアルアの『村の外の世界』と村の外を違う世界と表す言葉に少し不安を感じた。

その時、村長の家に中年の男が入ってきた。

男はあわてた様子でアルアの方を向いて

「アルア様。」

とだけ言った。

アルアは急に真剣な顔になると「わかった。すぐに行くよ。」と言った。

どうかしたのかと尋ねると、アルアは無理に作った笑顔でお仕事ですと言った。

魔力が高いアルアは僕の時のように、病人やけが人の治療をする仕事があるのだと考え、僕たちはアルアを見送った。

その後、部屋に案内され荷物を置いた僕たちは村を回ってみることにした。

村は結構広くてたくさんの子供達が走りまわっていた。

僕たちはアルアの仕事をしてみようと思い、近くの子供達にアルアのことを尋ねた。

「アルア様はねえ。お外に魔物退治に行ったよお。」

魔物退治？

それはどういふことかと子供達に聞くと

「アルア様はねえ村で一番魔力が強いから、村の近くに魔物が出たらねえ一人で退治に行くんだよ。」

僕たちは急いで村長の家に戻った。

村長にそのことを聞くと

「仕方ないんです。あの子は村の大人の誰よりも強い。もしあの子をやってくれないと、この村は常に魔物の恐怖におびえなければならなくなる。昔はこの村にもたくさん人が居て大人達も皆で協力して魔物を追い払っていたんです。でも、今は村の人間もどんどん減ってしまつて……」

村長の言い分も分かるが、納得はできなかった。

僕たちはアルアの向かった場所を聞き出すと、急いでそこに向かった。

村から1キロほどの場所にアルアはいた。

アルアの前には3メートルほどの緑色の巨人。

僕らの世界のゲームや物語でいうところのオークという生き物にピッタリな巨人が立っていた。

アルアの周りには他にもいろんな生き物の死骸があった。

僕はフィリアに援護を頼むとアルアに駆け寄った。

「ばか！何無茶してるんだよ！」

僕がアルアを肩を掴んで叫ぶと

「あ、ダイスケさん。すみません、心配かけちゃいましたか。でも大丈夫です。こんなのいつものことですからすぐに終わらせますよ。」

そんな辛いことを肩で息をしながら笑顔で言うアルアが儂く思えた。

「もういいから、後は僕に任せて。」

フィリアにアルアを任せると、オークに向かい剣を構えた。

オークは手に持った棍棒で殴りかかってきた。

しかし、動きは鈍く難なくかわし、足を斬りつけた。

血が吹き出る足を抱えて暴れるオークの頭に剣を突き立てた。

オークはしばらく暴れていたが、やがて力尽きた。

それを見届けると、すぐにアルアのそばに行った。

アルアは大きな怪我こそないようだが、ひどく疲れているようだった。

僕たちは、村長の家までアルアを運んだ。

アルアをベッドに寝かすと、僕たちは村長からの感謝の言葉を聞き流して部屋に戻った。

アルアのさびしい笑顔だけが頭に浮かんでいた。

18 神の子の夢

18 「神の子の夢」

部屋に戻った俺達はアルアのことを話していた。

アルアのことには心配だが、確かにこの村のことを考えると正直どうしようもないのかもしれない。

フィリアもアルアのことを心配していて、どうにか手はないのかと考えている。

だが、なんのいい案も浮かばないまま刻々と時間だけが過ぎていった。

それから30分ほどたったときドアをノックする音がした。

「ダイスケさん、アルアです。入っていいですか？」

「ああいいけど、もう大丈夫なのか？」

アルアはドアを開いて中に入ってきた。

そして、ベッドに腰をかけるとにつこりと笑った。

「はい。それですね、村の外の話、聞かせてもらえませんか？」
うそつき。

まだ動くのも辛い体を動かしてわざわざ下らない話を聞くためだけに来た。

僕たちにとって下らない話でも、この少年にとってはきっとすばらしい夢物語なのだろう。

僕はそんなアルアの笑顔を見て、少しずつ話を始めた。

本当にくだらないことばかりなのに、アルアは終始楽しそうにしていた。

そして、一通りのことを話し終えた。

「僕、一つだけ夢があるんです。」

とアルアが唐突に言い出した。

「どんな夢？」

「実は僕、世界を旅するのが夢なんです。いつか、世界を回っているなものを見てみたいんです。」

「……なら、僕たちと一緒に来ない？」

アルアを村から出して、いろいろなものを見せてあげたいと思った。危険はあるかもしれないが、それでも連れて行ってあげたいと思った。

しかし、アルアは首を振った。

「それはできません。今僕がいなくなったら村は魔物に襲われてしまいます。確かに連れて行ってももらえるのなら、どんなに嬉しいでしょう。でも、できないんです……」

とアルアは悲しそうに言った。

アルアは、その小さな体にどんなに重い責任を負っているのだろうか。

こんな小さな子供の肩にかかった村人の命。

「でも、誘ってくれて嬉しかったです。ありがとうございます。それじゃあ、僕もそろそろ寝ます。おやすみなさい。」

アルアはそそくさと部屋を出て行った。

僕たちはやるせない空気の中眠りについた。

次の日の朝

僕たちは村の喧騒で目を覚ました。

何事かと思いい外に出ると村人達が集まって騒いでいた。

近くにいた村人に話を聞くと

「村の近くで魔物が20体ほど見つかって、アルア様がお一人で・
・・」

と言った。

そして、村長さんが僕たちに駆け寄ってきた。

僕たちが何かを言う前に村長さんが僕たちにすがりついてきた。

「アルアを、アルアを助けてください！一人では無理だと言っても、お二人にご助力を願おうといっても聞かずに飛び出してしまったんです。」

「それで、アルアどこに！」

僕たちはアルアの場所を聞くと急いで走り出した。

僕たちが現場に着くと、12、3残っている魔物と

地に伏したアルアの姿があった。

19 外の世界

19 「外の世界」

「アルア！」

僕たちはアルアに駆け寄った。

「あ……れ、ダイ……スケさん？あはは、やっぱりばれちゃいましたか。」

「しゃべったらだめ。」

アルアの息は荒く、とても無事とはいえなかった。

フィリアにアルアを任せると、僕は魔物たちの方を向き直った。

なぜ、こんなに魔物たちが……

これも、この戦争と関係しているのか？

「残りの雑魚は僕に任せて。」

僕は必死で剣を振るった。

何度も魔物の攻撃を受けた。

しかしそれでも引けなかった。

そうして、数時間に及ぶ戦いの末になんとか全ての敵を倒すことができた。

「アルア！」

アルアは、疲れたのか気を失ってはいるが、すやすやと寝息をたてていた。

フィリアの治療の魔法も効いているらしく、傷跡はほとんど消えていた。

僕たちは、アルアを背負って村まで戻った。

村に帰った僕たちを迎えたのは手厚い歓迎だった。

村を救った英雄として僕たちはみんなに囲まれて感謝の言葉を述べられた。

僕たちは文句を言うつもりだったが、心のそこから感謝する人たちを前にしては何も言うことができずに夜まで過ごした。

夜

僕たちは部屋でまたアルアのことを話あっていた。

「やっぱり、アルアを連れて行くことは無理なんだろうか。」

「難しいと思います。やはり、アルアさんが居ないと村は守りきれませんから・・・」

何もしてやることのできない自分が腹立たしかった。

アルアはあんなに外にあこがれているのに

でも、何もしてやることはできない

アルアを連れて行くことならできる

簡単なのに

それにはたくさんの犠牲が出てしまう

きっとそれはアルアもわかってて

分かりすぎていて、それでもあきらめられないから

辛いんだ

だから、あんな作った笑顔をするんだ

僕たちは、この手でアルアの手を引いて連れて行ってやることもできないんだ

なにもできない

はがゆい

そんな思いの中、僕たちは眠りについた

朝

僕たちが出発をしようとするのと村のみんなが見送りに来てくれた。

「この度は、本当にありがとうございました。」

村長が頭を下げた。

「そんな、お礼をされるようなことなんて・・・」

してない。

そんなこと

だって、アルアを救うことはできていないから

小さな子供一人守れていないから

「ダイスケさん。」

「アルア・・・」

ごめん

ごめんアルア。

君を救えなかった。

連れて行ってあげたいのに

どこまでもどこまでも

「じゃあ、僕たちは行くよ。」

「はい、さようなら。」

「じゃあ、わしらも引越しの準備を始めるかのお、皆の衆」

「」「」おつ」「」

村長の言葉にみんなが答える。

「え？引っ越しって？」

「ああ、昨日皆で話し合って決めたんじゃ。皆が都会に住みたいってうるさいからのお。アルス王国に村全員で引越しじゃ。」

それって、つまり・・・

「じゃあ、おじいちゃん。僕は・・・」

「ん？お前は来なくていいぞ？わしは一人暮らしに憧れとるんじゃ。」

村長と村のみんなの気遣い

痛いほど良く分かった。

それなら、僕にも手伝えることがある。

「なら、僕から手紙を書きますから、それを王様に見せてください。こう見えても、ほんの少しだけ知り合いなんですよ。」

と、僕は手紙を書いた。

そして、それを村長さんに渡すと

「じゃあ、アルア。行こつか。」

アルアに手を差し出した。

「あ、えつと・・・はい！」

アルアは僕の手を取り笑った。

新しく増えた旅の仲間

たくさんものを見せてあげて

たくさんの人に会わせてあげよう

それがこの子にとって一番幸せなことだから

アルア

「外の世界によつて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2186d/>

赤い満月の昇る空

2010年12月26日16時40分発行